

## サウンドエデュケーションのヒント

NHK アーカイブス学術利用トライアル研究をベースとして

Sound Education tips to see from the sound in the video

Base of NHK archives academic use trial research

小林田鶴子(共栄大学)

Tazuko KOBAYASHI

(要旨)

テレビ番組は基本的に映像が中心のメディアであるが、サウンドアーカイブの視点で番組を見ると、番組を制作する段階からの音の扱われ方が見える。それらの観点は実は我々が日常音を聴いている聞き方と共通している。サウンドエデュケーションを実践する時、こうした聴き方の観点を知っておけば、音の風景を捉える時に、その人によって捉え方が違うことがよくわかる。また、映像と音との関係を考えることは、サウンドエデュケーションの実践に取り入れるのに有効であろう。

(キーワード)

サウンドスケープ、サウンドエデュケーション、音の記録、映像と音、音とメディア

### 1. 映像の中の音を聴く観点について

筆者は2013年より、「NHKアーカイブス学術利用トライアル研究」注1)で、テレビ番組をサウンドアーカイブの視点で調査を行った。

その中で、番組中の音を聴く視点として次の3点を挙げた。注2)

(1)「選ばれた音」と「録音されなかった音」の存在

録音という制約から、その現場にあった多くの音が他にあったということを考える必要がある。

(放送段階においても編集作業で削除された音がある)

(2)「意図された音」と「偶然に入った音」の区別

放送番組では、その音を「意図」として積極的に伝えようとしたケースと、意図していないのに、偶然収録された音がある。

(3)「録音できなかった音」の意味

録音しようとしたが、録ることができなかった音。しかし、この音はテレビでは聴くことができないが、現場には確かにあった音である。

### 2. 実際の番組に於ける音の観点別具体例

この3つの音の観点で実際の番組を当てはめると次のような例がある。

まず、(1)の例として阪神淡路大震災発生時のNHK神戸放送局の自動カメラが捉えた録画・録音が挙げられる。写真1は、地震が起こった瞬間の画像である。これは震災後に様々なところで放映されているが、そのほとんどが映像だけで、音声がかットされた場合が多い。写真2は地震3分後の映像であるが、普通は地震の瞬間の十数秒の映像のみが流れることが多く、その後の警報音やサイレンが鳴り響く状態はほとんど放映されていない。

この場合、現場の音も自動カメラが捉えた情報の中に含まれているが、番組を放映する前の編集段階で音を「選ぶ」作業をしているので、「録音できなかった音」というのは、録音されていても「放映されなかった音」として考えることができる。



写真1) 地震発生時の映像



写真2) 地震発生3分後の映像

次に(2)の例として、NHKテレビで放映された、教養セミナー「ふるさとの発見」～わがまちルネサンス～(1985)が挙げられる。この番組は、1984年に三陸鉄道が開通した岩手県下閉伊(しのへい)郡田野畑村の様子をレポートしたものである。その駅の一つ「カルボナード島越(しまのこし)」駅舎(写真3)の中にある喫茶店で、リポーターが当時の町長にインタビューしている場面がある。(写真4)この場面で聞こえる音は、二人の話し声に混じって、コーヒーカップ

を皿に置く音、スプーンがカップに当たる音、そして他のテーブルでの会話が高い天井のある空間に響きわたっているものである。現在は津波の為、この駅舎は完全に消失してしまい、2015年3月に別のところに開業した。そのため、この駅舎の音も二度と聴くことができない音である。

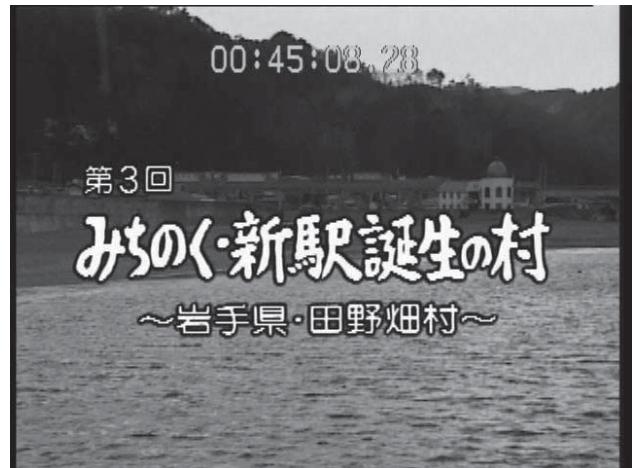


写真3) 番組のタイトル画面 右奥に見えるのがカルボナード島越駅の駅舎



写真4) 駅舎の中の喫茶店 高い天井が見える

この番組の場合、本来の目的で録音されたのは、インタビューの会話である。そういう意味では、喫茶店内の他の音は、意図されずに「偶然入った音」と考えることができる。そして、放映時点でも、その音は大きな意味を持っていなかったが、震災で建物が消失するという、環境の変化に

よって、「音のアーカイブ」としての価値が出てきたのである。

環境の変化によってその物の価値が変わることは音に限ったことではないが、音の場合、特にこの例にあるように、環境の中に地としてある音はなかなか意識しにくいものである。

(3)の例としては、東日本大震災で大きな被害を受けた石巻市北東部の北上川河口のヨシ原の例がある。ここは、ヨシが風にざわめく音が「音風景百選」にも選ばれている、自然豊かな場所である。NHK番組でもヨシを刈って茅葺屋根の材料とする様子が放映されている。その番組に微かにヨシが風にざわめく音が紹介されているが、かなり小さな音でほとんど聞こえない。このヨシ原も7割が津波で被害を受けた。

筆者は2014年9月にこの場所を訪れ、実際のヨシ原の様子を撮影、録音してきた。写真5はその辺りの様子である。



写真5) 北上川河口のヨシ原の様子

この時も録音した音にはほとんどヨシが風にざわめく音は入っていなかった。しかし、現地では確かにその音は聞き取ることができる。

また、このヨシ原の少し上流には、震災当時の石巻市立大川小学校がある。

大川小学校については、様々なところで報道されているが、この小学校がヨシ原に近いというこ

とは現地に行って初めて知ることができた。おそらく、津波で犠牲となった子どもたちも、川の近くで遊んでいる時にヨシ原の音を耳にしていたに違いないであろうと感じた。

### 3. サウンドエデュケーションに向けて

前章ではテレビ番組を中心に、音を聴く観点の具体例を示したが、実は我々人間の耳も、音を聴く時は同じような聴き方をしているのである。

音を聴く観点(1)で示した、音を選ぶという行為は、広義に捉えると、我々が日常生活で自然と音を取捨選択して聴いていることと共通している。そしてその結果、鳴っていても聞こえていない音が存在する。それが、(2)にある(聞こうとしなかったが)「偶然録音された音」にあたる。ただ、日常生活では、聞こうとしなかった音はその場で消えてしまっているのも、どんな音がしていたかは本人が確認することはできない。確認することができるのは、同時に複数の人数が同じところに居合わせていた場合である。この時、ある人が聞いていなくても、別の人が聞いていたという可能性がある。

ここに、「音探し」などのサウンドエデュケーションの実践をする時の指導のヒントとなることが示されている。複数の人数で音を聴く場合、多くの人が共通して聞こえた音があるのはもちろんのことであるが、他の人が聞こえなかった音を挙げる人がある。これは、その人の耳がある意味で「開かれていた」と考えることができる。また、同じ人が同じところの音を聴いた場合でも、回数を重ねることによって、新しい音を「発見」する場面があるが、それも何回も繰り返すうちに「耳が開かれてきた」と考えることができる。

ところで、この「耳が開かれる」とはどういうことかということ、もちろんたまたま聞こえてきたという場合もあるが、音を聴く本人の意識に負うところが大きいと考えられる。映像の中の音の観点(2)でも示したように、初めは意味のなかつ

た音が、震災で環境が変わったことにより、同じ音が意味を持って聞こえるようになったのと同じことである。

このように、同じ場所、同じ時刻にみんなで「音探し」をしても、一人ひとりの音に対する意味付けが違っていることによって、その人独自の音の聞こえ方があることを実感することができる。

このことは、機械的にも指向性の強いマイクで録音した時に象徴的に表れる。マイクを向けた方向の音のみが録音できるため、他の音がカットされたようになるからである。

サウンドエデュケーションで、「音探し」をする場合、こうしたマイクで音をとる時や、映像と音の関係を知ってみると、音風景を捉える時の自分の立ち位置が見えるのではないだろうか。

また、映像と音との関係でいえば、放送の歴史で、映像と音が同時に記録されるのは、1970年以降のことである。注3) それまでは、映像と音とは別に撮っていたのである。しかし、我々はあまりそのことに気が付いていない部分もあり、同時録音と同じように、映像と共に流れている音はその場で録ったものとして受け取る場合がある。逆にいえば、音は抽象的なものなので、意味付けによってどうにでもなるということもできる。

このような、映像と音の関係も考えながら、今後のサウンドエデュケーションに活かしていくことが大切であろう。

## 注釈

1) NHKアーカイブス学術利用トライアル研究；NHKが蓄積してきた番組数77万、ニュース項目545万という膨大なアーカイブは、これまで著作権等の「権利処理」や、プライバシーや人権等への配慮から、そのごく一部が『放送ライブラリー』や『番組公開ライブラリー』という形で公開されてきたに過ぎない。そのため、学術研究を目的として、膨大な資料を知の創造に役立つようとの趣旨から、2011年より試験的に開始されたプロジェク

トがNHKアーカイブス学術利用トライアル研究である。

本研究は2013年度に小林が研究代表者（共同研究者：鳥越けい子、兼古勝史）として実施したもので、音環境が激変したと考えられる二つの大震災を報道したニュースやドキュメンタリー番組の音の調査（震災前との比較も含む）を行ったものである。

2) 兼古勝史、「テレビ番組のサウンドアーカイブとしての可能性～NHKアーカイブス学術利用トライアル研究から～」、立教大学紀要応用社会学研究2014 No.56、p.252、2014

3) 前掲書で兼古は放送に記録された音について次のように区分している。（下線は筆者が記入）

(1)1925年～1953年代中盤 ラジオおよびニュース映画の時代

(2)1953年代中盤～1970年頃 テレビ、フィルム撮影（別録り）の時代

(3)1970年中盤～1990年頃 テレビ、VTR（同時録音）の時代

(4) 1990年頃～現在 テレビ、ステレオ～サラウンド（高音質・臨場感）の時代

※本稿は、口頭発表「サウンドアーカイブとしてのテレビ番組」に内容を付加してまとめたものである。